

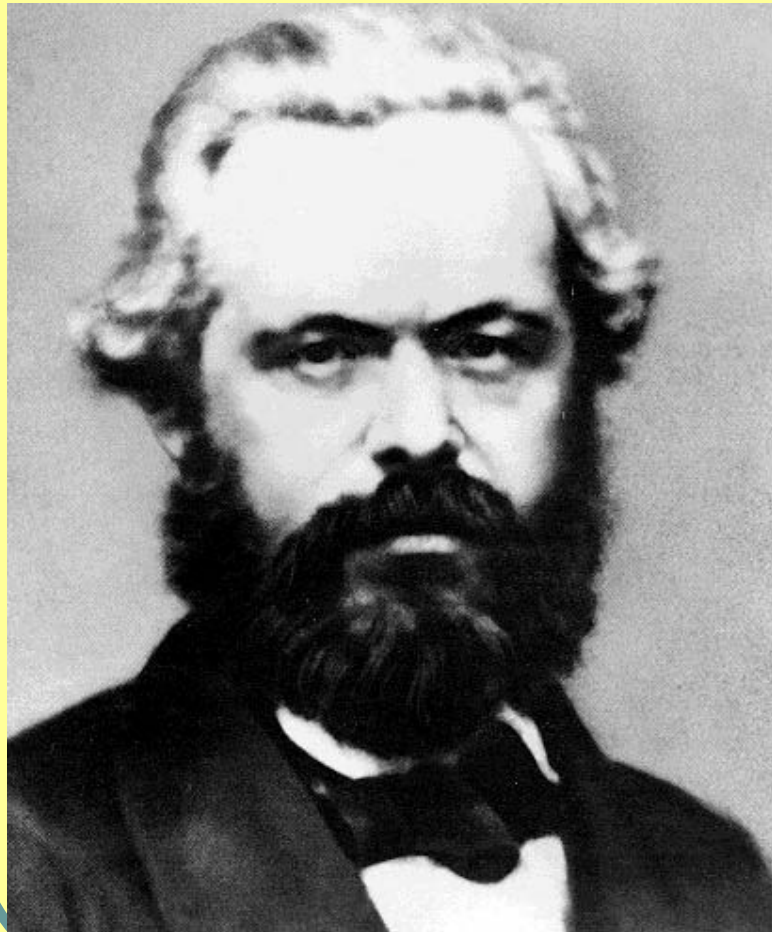
若者よ、マルクスを読もう



今日の話の柱

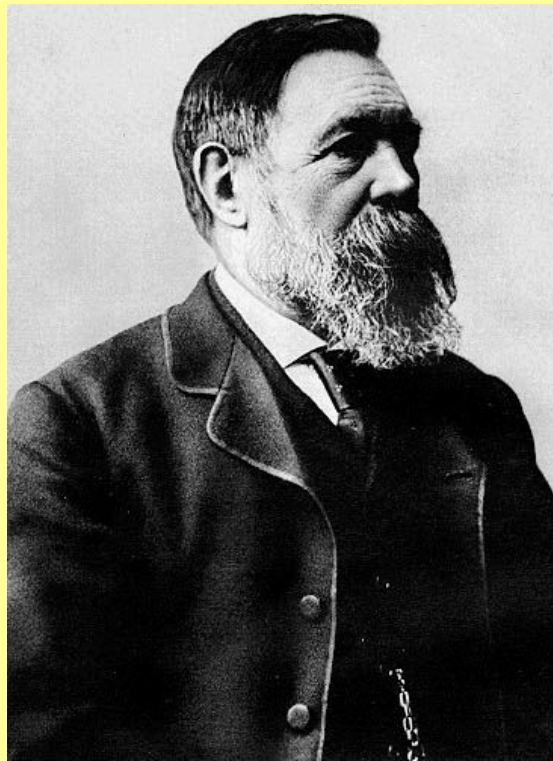
- ①マルクス超入門
- ②マルクスをなぜ学ぶのか
- ③マルクスが生まれた時代
- ④若いマルクスが選んだ道
- ⑤自分の到達点に安住しないマルクス
- ⑥マルクスが積み上げた科学の基本
- ⑦もしマルクスが現代を分析したなら
- ⑧具体的な学び方のヒント

①マルクス超入門



- ①マルクス(1818-83)
- ②革命家、徹底した社会の改革者。科学的社会主義の学説と運動の創始者。
- ③世界観、経済理論、未来社会論、革命運動論など多面的で統一的な学説。
- ④〈資本主義も人類社会の一段階。改革の担い手は労働者階級。〉

今日は脇役、エンゲルスとレーニン



- エンゲルス(1820-95) マルクスの生涯の共同者。
- レーニン(1870-1924) 20世紀を代表する革命家。

②マルクスをなぜ学ぶのか

- 今、なぜ19世紀のマルクスを読むのか
- 「①労働者たちが苦しみ、たたかっていた当時の社会の中で、変革者として生きたマルクスらの真剣な生き方を肌で感じ」
- 「②切実な思いの下に探究された、その学問の深みをしっかり学ぶこと」
- 「③21世紀の現実に変革者として立ち向かう気概を受け継ぎ」
- 「④マルクスたちが見ることのなかった新しい現代の世界を、自分たちで分析していく理論的な導きを得る」こと

マルクスをどのように学ぶか

- 「われわれの理論は発展の理論であり、まる暗記して機械的に反復するような教義ではありません」
(エンゲルスからケリーウィッシュネウエツキへの手紙、1887年1月27日、『全集』36巻、525ページ)。
- 「マルクス自身が好んだ『すべてを疑え』の精神にしたがって、21世紀の現実に照らし、マルクスを点検していかねば・・・マルクスを『自分のあたまで考える』」
- それがマルクスを発展させる道を見つけることにもなる、現代日本と世界の変革を念頭して
- 原動力は変革への情熱と自己の成長に対する責任感、『マルエン全集』を読み通した議員候補

③マルクスが生まれた時代

- 1789年フランス革命、1803～15年ナポレオン戦争（ヨーロッパ諸国との）、侵略戦争だがフランス革命の精神を各国に広める効果もあった、ナポレオン・ボナパルトの敗北・失脚、特にロシアとイギリスが大きな役割
- 1815年ウィーン会議、主要戦勝国が神聖同盟、革命の影響を排して旧体制の復活をめざす（君主制、フランスでもブルボン王朝が）、しかし思想的影響は排除できず
- 封建制の社会から資本主義の社会への大きな変化の中でのジグザグの動き

ドイツでは君主制打破と統一が課題に

- ナポレオン戦争時に統一ドイツはなかった、プロイセン、オーストリアなど小国家の分立
- ウィーン会議では、38の独立した君主制国家による「ドイツ連邦」が決まる(のちに39ヶ国に)、オーストリアは「ドイツ連邦」の一員であり連邦外ではハンガリーなどの支配者でもあった
- 世界市場に君臨するイギリス、経済的に統一されたフランスに対して、39ヶ国ごとに関税のあるドイツは経済的な発展で遅れていた
- 専制君主制の打破とともに「ドイツ統一」の形成が歴史の課題に

④若いマルクスが選んだ道

- 1818年(ウィーン会議の3年後)、トリーア(プロイセン・ライン州)に誕生、フランス革命の強い影響
- ギムナジウムの卒業作「**職業の選択にさいしての一青年の考察**」(35年8月)、17才
- 「**地位の選択にさいしてわれわれを導いてくれなければならぬ主要な導き手は、人類の幸福であり、われわれ自身の完成である。…人間の本性というものは、彼が自分と同時代の人々の完成のため、その人々の幸福のために働くときにのみ、自己の完成を達成しうるようにできている**」(『全集』第40巻、519ページ)。
- 個人主義とはまったく反対、「**人類の幸福**」と「**自身の完成**」を重ねる人生観

大学、博士学位、ジャーナリズムへ

- ボン大学、ベルリン大学で法学や哲学、ベルリン大学では青年ヘーゲル派(ヘーゲル左派)に所属、政治と思想を大いに論ずる
- 41年3月ベルリン大学を卒業(22才)、4月イエーナ大学から「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学との差異」で博士学位
- ボン大学への就職を考えるが、進歩的な学者が大学を追われる一連の事態を前に断念
- 42年5月「ライン新聞」(ブルジョアジーの改革派が発行)に政府批判の論説を、10月には主筆として編集者の中心人物に(24才)

新しい課題を見出し次の段階へ

- 「検閲」とのたたかい、農民による「木材窃盗」の取り締まり、ぶどう栽培業者への課税など、**生きた人間が直面する具体的な問題**に取り組む
- ①物質的利害関係について発言することへの困惑、②共産主義の思想と運動に直面、プルードン他、③青年ヘーゲル派と手を切る、現実との対決
- 43年1月プロイセン政府が4月からの**発行禁止**を決定、3月17日「目下の検閲事情のために、今日をもって『ライン新聞』の編集部からしりぞいた」、24才

科学的社会主義の思想・運動家に

- 科学的な世界観・変革観を探求、パリで『独仏年誌』(44年)に「ユダヤ人問題について」と「ヘーゲル法哲学批判序説」を(25才)、青年ヘーゲル派を批判した『聖家族』(45年)
- 科学的社会主義の土台を形成、ブリュッセル(ベルギー)でエンゲルスと本格的な共同「ドイツ・イデオロギー」(27~8才)、プルドン批判の書物『哲学の貧困』(47年)
- 共産主義の運動を、46年共産主義者通信委員会設立、47年正義者同盟からの加盟要請、48年共産主義者同盟の委任により『共産党宣言』(科学的社会主義の初めての綱領)を執筆(29才)

48年「ドイツにおける共産党の要求」

- 「フランス2月革命」からヨーロッパ48年革命へ（オーストリア、プロイセン、イタリア、ハンガリー・・・）、3月民主主義革命の綱領（29才）
- ①全ドイツを単一不可分の共和国に、②21才以上の全ドイツ人は選挙権・被選挙権を、③労働者もドイツ国会に議席をもちうる、⑤訴訟は無料、⑥農民を苦しめたあらゆる封建的負担は廃止、⑦王侯領他は国有化、国民の利益のために経営、⑩私的銀行は廃止、唯一の国立銀行の銀行券に法定通用力を、⑪すべての交通機関を国有化し、無産階級は無料に、⑮高度の累進税の実施と消費税の廃止、⑯国家は全労働者の生活を保障し、労働不能者を扶養する、⑰無料の普通公民教育

もし、マルクスが現代に生きていたら

- 国民が古い自民党政治でない新しい政治を模索する中で、「構造改革」に、基地・安保問題に、若いマルクスはどのような態度をとっただろう
- 「各国が主人公」への世界構造の大きな変化、核兵器廃絶への新しい展望、「市場をつうじた社会主義への道」や「新しい社会主義」が探求される世界に、マルクスはどういう態度をとっただろう
- マルクスは理論的に科学的社会主義者である前に、すでに革命家(変革者)であった
- 私の生きがい为社会進歩に結びつけて

⑤自分の到達点に安住しないマルクス

- 革命家としても、科学者としても
- レーニン『カール・マルクス』の伝記を参考に
- ①1842～43年、革命的民主主義者として「ライン新聞」で活動、唯物論と共産主義への前進過程
- ②43～48年、パリやブリュッセルで科学的社会主義の土台をつくる、エンゲルスとの共同の開始、『ドイツ・イデオロギー』、『共産党宣言』
- ③48～49年、ヨーロッパ革命の中で「新ライン新聞」の編集長として、革命を総括した『フランスにおける階級闘争』『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』『ドイツにおける革命と反革命』

成長の中に位置づけ、現代的に読む

- ④49～64年、ロンドンで来るべき革命運動の高揚にそなえ、世界観の仕上げや経済学の研究を、『経済学批判』への「序説」と「序言」、多彩な国際政論活動
- ⑤64～72年、国際労働者協会（第一インタナショナル）での活動、『賃金、価格、利潤』、『資本論』第1巻、『フランスにおける内乱』
- ⑥72～83年、『資本論』の完成をめざしながら、各国の運動への助言を行う晩年、『ゴータ綱領批判』
- マルクスの人生も理論も歴史と成長の中にとらえる

⑥マルクスが積み上げた科学の基本

- 社会の変革には、社会がもつ病理(問題点)の解明と科学的な治療法の探求が不可欠
- 「社会はこうあるべき」という理想の提示でなく、「社会はどうなっているか」「何をきっかけに、どう発展するか」の学問が必要、空想から科学へ
- 人間が直面する問題の解決が学問の原動力、世界観、経済理論、未来社会論、革命運動論、結果として、それらの総体として科学的社会主義は構成された、縦割りでない「全一的」(総体的)な学問、閉鎖的でない開かれた学問、変化する学問

世界観の特徴－①唯物論の見地

- 物質が先か意識が先か、多様な言及の中から
- 「あるけなげな男が、かつて、人間が水に溺れるのは彼らが**重力の思想に取りつかれている**からでしかないと思い込んだ。彼らが、たとえばこの観念を迷信的な観念、宗教的な観念と言明することによって、**それを頭から追い払えば**、彼らはすべての水難を免れるというのだ。生涯にわたって、彼は、重力の幻影とたたかったが・・・このけなげな男こそが、ドイツの新しい革命的哲学者たちの典型であった」(『ドイツ・イデオロギー』)。
- 重力の思想をなくせば水難は免れる(**観念論**)、重力にさからう方法を身につけなければ水難は免れない(**唯物論**)、貧困は、失業は、病気は

世界観の特徴－②弁証法の見地

- 静止・孤立の形而上学か、運動・関連の弁証法か
- 「世界はできあがっている諸事物の複合体としてではなく、諸過程の複合体としてとらえられねばならず、そこでは、みかけのうえで固定的な諸事物も、・・・生成と消滅のたえまのない変化のうちにある、この変化のうちで、みかけのうえでは偶然的なすべてのものごとにあっても、またあらゆる一時的な後退が生じても、結局は、一つの前進的發展がつらぬかれているという、偉大な根本思想」(『フオイエルバッハ論』)
- ヘーゲル弁証法の革命的側面を観念論から解放
- フオイエルバッハが果たした役割、2面性

世界観の特徴－③社会を見れば

- 「歴史の本来の最終的な推進力をなしている動力を探求することになると、・・・個々の人々の動機ではなくて、問題になるのは、人間の大きな集団、民族全体、さらにそれぞれの民族のうちでの諸階級全体を動かす動機であり、しかもこれも・・・大きな歴史的変動をもたらす持続的な行動にみちびくような動機である」(『フョイエルバッハ論』)
- ①社会の動きの土台は経済の動き
- ②社会の仕組みは段階的に交代する
- ③社会改革の主役は階級

経済理論の特徴－①運動法則の解明

- 広義の経済学と狭義の経済学
- 「さまざまな人間社会が生産し交換し、またそれにおうじてそのときどきに生産物を分配してきた、その諸条件と諸形態とについての科学としての経済学—こういう広義の経済学は、これからはじめて作りだされなければならない。今日までにわれわれがもっている経済科学は、ほとんどもっぱら、資本主義的生産様式の発生と発展とに限られている」(『反デューリング論』)
- 社会の土台の生成から死滅にいたる運動を
- 「近代社会の経済的運動法則を暴露することがこの著作の最終目的である」(『資本論』)

経済理論の特徴－②資本主義の矛盾

- 「資本主義的生産の真の制限は、資本そのものである。というのは、資本とその自己増殖とが、生産の出発点および集結点として、生産の動機および目的として、現われる、ということである。生産は資本のためのものにすぎないということ、そして、その逆ではないということ」(『資本論』)
- 資本の自己増殖とは、剰余価値の生産(利潤の追求)のこと、①それが様々な社会的害悪(貧困・恐慌・環境問題など)を生みだし、②同時に、それを乗り越えようとする人間集団(労働者階級など)を生み、彼らに資本主義を改革する持続的な動機を生みだしていく

未来社会論の特徴－①利潤第一の転換

- 資本主義の真の制限を絶つ、利潤追求のための生産でなく、**社会の幸福のための生産へ**、それを達成する手段としての「**生産手段の社会化**」
- 共産主義とは「**共同の生産手段を使って労働し、個人個人がもつ労働力を一つの社会的労働力として自覚的に支出している自由な人びとの連合体**」(『資本論』)
- ①**貧困と差別の一掃**、②**経済の計画的運営**、③**人間の全面的な発達を目標に**(生産もまた生きるための手段)、④**発達した諸個人による社会の飛躍的発展**

未来社会論の特徴－②漸進的な改革

- 「労働の奴隷制〔資本主義のこと〕の経済的諸条件を、自由な結合的労働〔共産主義のこと〕の諸条件とおきかえることは、時間を要する漸進的な仕事でしかありえないこと（その経済的改革）、そのためには、分配の変更だけでなく、生産の新しい組織が必要であること」「その調和のとれた国内的および国際的な調整が必要である」（『フランスにおける内乱』第一草稿）
- 分配による豊かさだけでなく、自発的でありうるはたらき方そのもの変革、生産組織間の計画的な調整

未来社会論の特徴－③長い過渡期

- 「現在の『資本と土地所有の自然諸法則の自然発生的な作用』は、新しい諸条件が発展してくる長い過程を通じてのみ、『自由な結合的労働の社会経済の諸法則の自然発生的な作用』によっておきかわりうること、それは『奴隷制の・・・作用』や『農奴制の・・・作用』が交替した場合と同様である」(『フランスにおける内乱』第一草稿)
- 自然発生的(なんらかの強制によるのではなく)ということが大切、過渡期を通じて**国家**は眠り込む
- **スターリン**は1936年に過渡期の終了を宣言したが、現実には強烈な抑圧の**国家**が存在した

革命運動論の特徴－①多数者革命論

- 普通選挙(議会)をつうじた多数者革命の探求
- 「社会組織の完全な改造ということになれば、大衆自身がそれに参加し、彼ら自身が、なにが問題になっているか、なんのために彼らは肉体と生命をささげて行動するのかを、すでに理解していなければならない。…そのためには、長いあいだの根気づよい仕事が必要である」(『フランスにおける階級闘争』への序文)
- 何のためのどういう改革かをよく理解した多数者による多数者のための革命
- そういう多数者をつくりあげる根気強い仕事こそが、革命を準備する仕事の核心

革命運動論の特徴－②段階的変革論

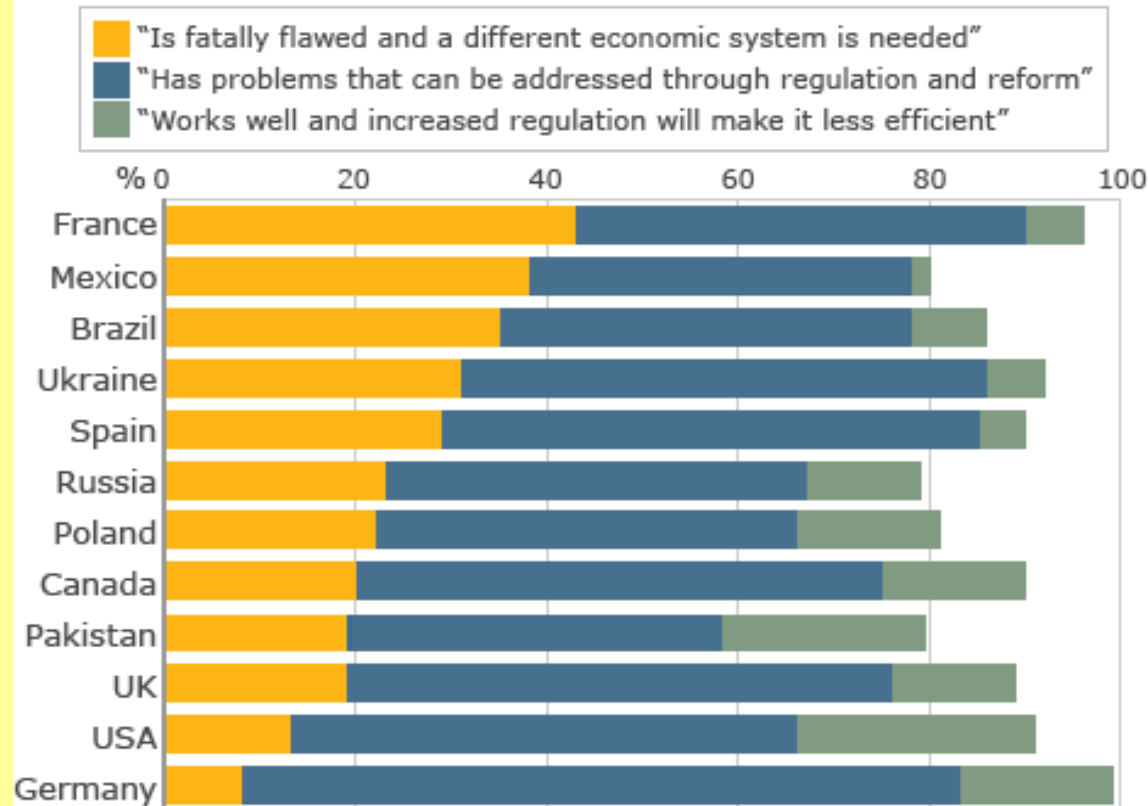
- 「資本は、社会によって強制されるのでなければ、労働者の健康と寿命にたいし、なんらの顧慮も払わない」
- 「工場立法、すなわち社会が、その生産過程の自然成長的姿態に与えたこの最初の意識的かつ計画的な反作用は・・・大工業の必然的産物」(『資本論』)。
- 10時間工場法、ロシア革命の影響(8時間労働や社会保障宣言が各国へ、ILOへ)、人民戦線政府、戦後の国連とEUなど、資本への「意識的・計画的反作用」が深まってきた
- 「反作用」=ルールを深める資本主義改革の先に社会主義的変革への選択が生まれてくる

〔参考〕新しい経済システムへの関心

- 2009年11月BBCの27ヶ国(2万9000人)世論調査、「ベルリンの壁崩壊から20年、自由市場の資本主義に対する不満が広がっている」
- 「資本主義はよく機能しており、規制強化は能率低下を招く」11%、自由主義で良い
- 「規制と改革で対処できる問題を抱えている」51%、資本主義にはルールが必要
- 「致命的な欠陥を抱えており、新しい経済システムが必要だ」23%(フランス43%、メキシコ38%、ブラジル35%)、資本主義以外のシステムへ

12ヶ国の結果比較

Free market capitalism



Source: Globescan poll for BBC World Service

- <http://news.bbc.co.uk/2/hi/8347409.stm>

⑦もしマルクスがー①世界経済危機

- 周期的恐慌と金融危機の結合
- 1825年からの**周期的恐慌**（経済循環の中での危機の局面）、2008年からの現在も
- 物のつくりすぎで社会が苦しむ、恐慌論の3本柱、①**恐慌の可能性**、②**恐慌の原因・根拠**（生産と消費の矛盾）、③**恐慌の運動論**（流通過程の短縮、過度の投機、信用が「架空の需要」を生みだす）
- 今回は**金融バブル**が「架空の需要」の膨張を促進、破裂による被害を拡大させた
- 個人消費の拡大と金融投機への規制が必要、今回の危機で**大国批判**や**資本主義批判**が拡大

もしマルクスがー②地球温暖化問題

- 資本主義の成立(産業革命)以後、大気中の二酸化炭素が急増(化石燃料の消費)
- 利潤第一主義が生む「生産のための生産」、「大量生産・大量消費・大量廃棄」という生活の強制
- 97年「京都議定書」、01年ブッシュ政権が脱退、日本はサボリ
- 「京都議定書」の基準年1990～06年の削減実績、ドイツー18.2%、イギリスー15.1%、フランスー3.5%、日本+5.3%、アメリカ+14.4%
- 資本主義の枠内で大企業への規制がどこまでできるか、他方でクリーンエネルギーの急速な開発に向かう資本の力も

もしマルクスがー③ジェンダー問題1

- 「ジェンダー」用語、〈性にもとづく人間の社会的地位の相違〉、歴史の中で変化すると、科学的社会主義にとっては常識、社会構築主義の問題
- 「マルクスはジェンダー・ブラインド」、①「家族賃金思想」(成人男性が家族を養う賃金を受け取るべき)、②『資本論』は家族・家事労働を分析しない、③労働時間の短縮で女性を優先したのは「家族賃金思想」のため
- 回答、①女性や子どもによる世帯収入の複数化を分析、②再生産の角度から家族や家事労働を理論の内に、③女性の労働参加を社会発展に必要な要素と、さらに男女共通の8時間労働を主張

もしマルクスがー③ジェンダー問題2

- ①「市民社会」には家族が含まれる、②『資本論』は共働き家族の搾取を取り上げている、③「家庭」は労働力の維持・再生産の場
- 専業主婦による「家事労働への支払い」、成人女性の半数を視野の外におく経済学など論外、①家事労働は夫(労働力)を維持し、子ども(労働者)を再生産する、資本に不可欠、②専業主婦の労働力も、夫の賃金で再生産される、③法的には「労働の対価」として夫(家族手当)に、そこから「夫による扶養」という外観、夫の「権威」のもと、④真実を見抜いても「夫による扶養」の外観はかわらず、女性の最終的解放には経済的自立が必要

もしマルクスがー④現代世界の構造

- ソ連崩壊以後の世界構造の急速な変化
- ①「社会的市場経済」をめざすEU型資本主義の発展（93年EU発足）、ドル支配の脱却をめざす単一通貨ユーロ（99年導入）
- ②アメリカ帝国主義の世界的な威信喪失、経済的地位の低下、スマートパワー路線の模索
- ③BRICs、ネクスト11など新興諸国の経済的成長と政治的発言力の拡大、連帯の広がり
- ④「市場を通じた社会主義への道」を模索する中国、ベトナムの成長と世界的ネットワーク、「平和共存」
- ⑤「新しい社会主義」を模索する国の登場、ベネズエラ、ボリビア、エクアドル

もしマルクスがー⑤日本社会の発展1

- ①「開国」の圧力のもとでの資本主義化(富国強兵の軍事的資本主義)、ブルジョア民主主義を求める力の弱さ(大正デモクラシーへの弾圧)ー「自由・平等・博愛」「王政の打倒と議会」を求めたフランス大革命、ヨーロッパの1848年革命との相違
- ②「脱植民地化」に向かう世界の中での帝国主義的膨張政策、敗戦による植民地喪失と侵略への無反省(戦前・戦後の政治と国民意識の連続面)ーベトナム・アルジェリアなど「脱植民地化」の葛藤の歴史をもつフランスとの相違

もしマルクスがー⑤日本社会の発展2

- ③アメリカによる占領支配のもとでの憲法体系と安保体系の対立、戦後民主主義の脆弱性
- ④アメリカ帝国主義への従属、独自の外交戦略がもてない支配層、「財界・アメリカいなり政治」の形成ーユーロ、「社会的市場経済」路線のEUとの相違
- 日本資本主義の独特の歴史の中で形成された現代日本(社会と国民)の成熟度
- ①「構造改革」からの脱却、②東アジアとの友好と経済協力、③経済・平和・環境での世界への積極的貢献という課題、国民の政治的・思想的成長なし未来を開くことができない局面、政策とともに思想を

⑧具体的な学び方のヒント

- 学び(自分の成長)を生活の中の優先事項に
- 学びの基本は独習、ヒトの話し(講演)はヒントと勢い(全体はどうせ3日で忘れる)、集団学習で自分の独習を点検する
- 独習の基本は読書、「読める」から買うのではなく、「読める人間になりたい」から買う、知的成長には背伸びが必要
- 読書の規模(量)をはっきりさせて、古典選書、『資本論』、不破哲三氏の関連書すべてを
- 独習には計画が必要、いつまでにどの本を、手帳に

本の読み方のいろいろ

- 一定の時間内に読む量を決めてページをめくる(集中力を鍛える、忙しい人ほど良く学ぶ)
- 必ずペンをもって欄外に書き込みを、新品の本を自分だけの本につくりかえる、繰り返し読むことを前提に(欄外ノートと冊子ノート)
- ①小説のように読む、変にかまえない、毎日読めば慣れる(筋トレと同じ、継続は力)、音読、読み合わせ、わからないところは他人(コーチ)に聞く
- ②段落の1行目だけを読む、流れをつかむ、気に入ったところしか読みこまない
- ③段落の中身を「ひとこと」で段落の上に書き込んでいく、中身をつかまえていく(「綱領・古典の連続教室」も)

効率的な学びのスタイルをつくる

- 学びの成果を書いてみる(内容、感想、読んだという事実だけでも)、ツイッター、ブログ、組合ニュース、新聞・雑誌の読者欄等・・・気楽に
- できるだけ「しゃべる機会」をつくる、講師活動から会合での一言報告など
- 学習レジュメは以前のをバージョンアップする、過去の到達点をいつでも次の出発点に(パソコンの使用は前提)
- 図書館、喫茶店、電車などに自分を閉じ込める、学びの「空間」(条件反射)を利用する
- 時間の管理は決定的、「空き時間」こそ最重要、冊子手帳とグーグルカレンダー

マルクスへの助走のために

